

竹内街道と古代天皇陵

昭和36年卒 大阪平野区在住 鈴木敏夫

1 プロローグ

我が国は神武天皇以来126代の新天皇が2019年5月即位して元号は「令和」に改元。2000年も続く長い歴史のなかで脈々と伝統を受け継ぎながらも、それぞれの時代を反映し天皇と主権者である国民と向き合う時代を迎えています。

昭和36年母校を巣立ち、森永乳業で乳牛改良事業に従事し昭和時代を忙しく走り抜け、平成10年代に退職して年金生活を送るなかで、わが国の成り立ちに興味を覚え、肉体と頭脳の劣化予防を兼ねた居住地の近隣に多く存在する「古墳めぐり」のレポートです。

ご笑読ください

2 わが国の国道の誕生は「竹内街道」

大和朝廷（4～7世紀の日本の国家形成に際しその中心となった中央組織。地理的には現在の奈良県の説がある）と各地の豪族と関係をつくり、海外と交流を進めるために港の設置が必要不可欠で、大阪湾の堺港と大和（奈良）を結ぶ道が「竹内街道」でわが国最初の官道（国道166号）として人物や物資の往来で賑わっていたことでしょう。

大阪の中心は大阪城、現代は大阪府庁。このエリアに難波宮遺跡があり、建設や道路工事で宮殿跡から多数の木簡が発掘されています。

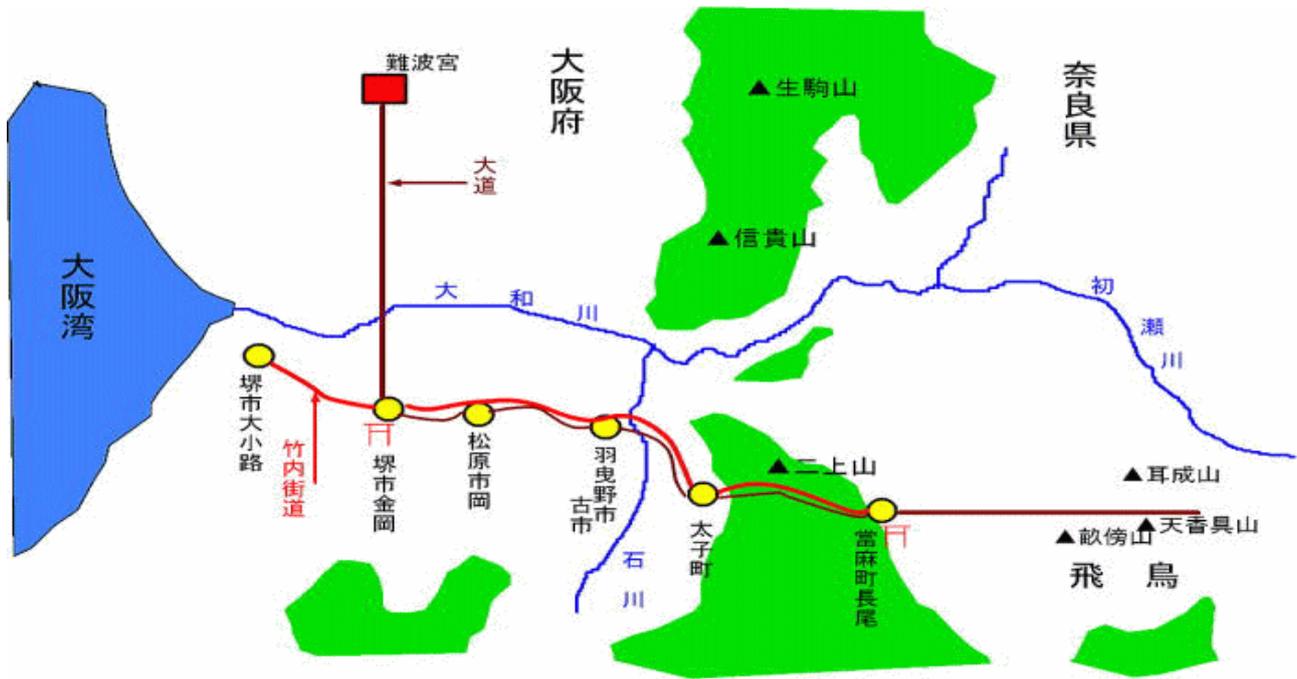
この地は先史時代には海が近く貝塚遺跡も発見されています。この地から南下すると世界遺産の仁徳陵（大仙古墳）に往きつき、ここから東に向う道筋に多数の大小古墳が点在しています。この古墳を見ながら河内を経て県境の竹内峠を越え大和（奈良葛城市・長尾神社）に至る26Kmが我が国最初の官道といわれる「竹内街道」です。この官道は大和に入り内陸の大和三山を縫い、古代王朝の舞台となる飛鳥の里（奈良県高市郡明日香村付近に相当する）に通じています。推古時代（推古天皇・第33代554年-628年）から各地の豪族や中国大陸・朝鮮半島からの使節団や物資も行き交う重要な街道で、此処を歩くと聖徳太子、小野妹子、松尾芭蕉、吉田松陰など歴史上人物や牛車の往来が脳裏に浮かぶ、奈良と大阪を結ぶ街道で車の交通量が多くみられます。

この街道沿いには仁徳陵の他に、応神（第15代天皇）、用明（第31代天皇）、推古など話題の多い天皇陵が在ります。特に大阪南河内・太子地区には聖徳太子御廟を中心に蘇我一族の天皇墳墓が点在しており、地形から日本版「王家の谷」を彷彿させます。天皇陵は明治以降国の管理下にありますが、名も無き墳墓は崩壊し石棺が露出しているのも見られます。

古墳時代は、豪族の蘇我氏・物部氏の権力闘争や天皇家を巡る複雑な人間関係などミステリアスな部分が多く、その中で推古帝と厩戸皇子（聖徳太子）による中央集権国家の古代国家創生の躍動を肌で感じ古墳埋葬人の生きた時間を共有する楽しい時を過ごすことができます。

特に竹内街道の海に近いスタートエリアには仁徳陵など大型前方後円墳が集中し、この地区の古墳サイズや形状は様々で、百舌鳥・古市地区と太子地区では古墳の形状が若干異なっています。街道から外れた小型円墳の高松塚古墳や藤ノ木古墳から国宝級のお宝が出土して歴史や古代国家の動静が垣間見え、森と墳丘にロマンの世界が秘められています。

「参考 1」 竹内街道図と周辺図 Google マップより



「参考 2」

4世紀ころから7世紀頃にかけての時代区分として「大和時代」が広く用いられ、その時期に日本列島の主要部を支配した政治勢力として「大和朝廷」の呼称が一義的に用いられています。なお大和朝廷は、長年近畿地域に権力基盤が置かれ、この地に歴史的遺産が多く存在し、大阪堺市に在る仁徳陵を代表とする円と四角を合体させた前方後円墳は日本独自の形で5世紀中頃に約15～20年を要して築造されたと推定されています。

日本最大の前方後円墳で北側の反正天皇陵古墳(田出井山古墳)、南側の履中天皇陵古墳(石津ヶ丘古墳)とともに百舌鳥耳原三陵と呼ばれ、現在はその中陵・仁徳天皇陵として宮内庁が管理しています。

「参考 3」

大和三山は奈良盆地の南部に位置し、香具山(152.4m)、畝傍山(199.2m)、耳成山(139.7m)の3つの独立小丘陵から成る。香具山は多武峰から北西に延びる支稜線が浸食により切り離され、独立丘陵として残存したもので、畝傍山と耳成山はそれぞれ沖積盆地底に位置する円錐形のいわゆる死火山である。3つの山は古来、有力氏族の祖神や産土神など、この地方に住み着いた神々が鎮まる山として神聖視され、その頂部や麓に『日本書紀』に記す天香具山社、『延喜式』の式内社である畝火山口坐神社、耳成山口神社などが祀られてきました。(文化遺産より引用)

3 古代天皇陵

(1) 大仙「だいせん」古墳(仁徳天皇陵)

2019年7月大仙古墳など周辺の49個の古墳群が世界遺産に登録されました。代表格の大仙古墳(仁徳天皇陵)は三重の周溝に守られ、周囲の丘陵から多数の埴輪が出土し、巨大前方後円墳と中学生時代に学ばされた懐かしい記憶があります。

因みに墳墓の長さは486m、周囲は3km、広さは世界屈指で、埋葬者は延喜式により第16代仁徳天皇とされていますが、複数人の埋葬説（前方部にも石棺）もあります。仁徳天皇時代の記録がなく、天皇の在位期間や業績も明らかではありません。そのため名称は天皇名でなく地名由来の「大仙古墳」が一般的です。当古墳の周囲に従者の小型墳墓（陪塚）が多く、一説には墳墓ではなく埋葬者の備品を埋めた説が有力とされています。

百舌鳥エリア（堺市）には仁徳陵・17代履中陵・18代反正陵など。一方の古市エリア（羽曳野市）に15代応神天皇陵などの巨大古墳の築造があり、これらの古墳のサイズと造成位置から当時の歴史物語が想像される。神武天皇以来29代欽明天皇あたりまで記述がなく諸説の世界です。

（2）用明天皇陵（31代・春日向山古墳）

大阪・奈良境界山麓の竹内街道には用明天皇陵への案内石碑があります。古墳は大型で整備されています。用明天皇の在位期間は3年と短く激動の時世を予感させる位置にいました。二男が厩戸皇子（聖徳太子）という事で毎年5月宮内庁職員による正辰祭が行われています。

（3）聖徳太子御廟（叡福寺北古墳・三骨一廟）

大阪南河内郡太子町・竹内街道沿いに叡福寺に守られている大型の円型古墳がみられます。もともと太子の母が祀られていた場所に聖徳太子と妃（膳大郎女）が三骨一廟で祀られ、入口は封印されています。正面の斜面に独特な瓦家造りの拝所があり、埋葬当時から寺に手厚く守られている墳墓は、他でみることはできません。厩戸皇子（聖徳太子）は官位12階や17条憲法の制定など行政手腕を発揮、仏教を庇護、各地に寺院建立など華々しい業績の歴史があります。これは聡明な太子の能力と蘇我一族の力と推古天皇摂政の後見が礎となっている背景を推察することができます。「聖徳太子の死因は何だったのか？」

西暦601年、聖徳太子は奈良市の南西に位置する広範囲の里に政治を司る斑鳩宮を造営し、また世界最古の木造建築の斑鳩寺（世界遺産の法隆寺）も創建しています。

西暦622年ごろ斑鳩の里（いかるがの里）と親しまれる里を中心に痘瘡（天然痘）が大流行したようです。感染は御殿にも及び、太子の母が死亡。その後、太子と妃が病死。母親は石棺で埋葬されていますが、太子と妃は麻布を漆で固めた乾漆棺とされています。石棺でないのは急逝との関係があると推量できます。太子は推古天皇が手厚く葬ったとされています。なお聖徳太子（574～622年。享年48）は死後の敬称（諡号）として129年後の史書に初めて記載されています。

（4）推古天皇陵（33代・磯長山田陵）

額田部皇女（推古天皇）は欽明天皇の長男・敏達天皇の妃であり、しかも二人は共通の父欽明天皇の腹違いの異母兄妹であり、額田部皇女の周りは天皇が多いが短命在位や暗殺など悲惨な出来事が続いています。その中で額田部皇女が蘇我馬子に請われて33代推古天皇となった。推古帝は長寿（74歳）で子女も多い。特に甥の厩戸皇子を摂政にして強い意思を発揮、律令国家への道を推し進めました。覇権を我が物とする臣下蘇我馬子の要求を拒否するなどバランスを取りながら厩戸皇子と共に稀に見る政治能力を発揮しています。この激動期の最強最大のキーマンであった。古墳は方墳で正面はきれいに整備されており、推古帝の長男竹田皇子との合葬墳墓です。

(5) 二子塚古墳（無名墳墓）

推古天皇陵のすぐ裏に小山のような土盛りで、ラクダのふた瘤の頂上部にあたる石棺の一部が露出しています。周囲には畑が耕され小山に迫り。境界物もなく長年耕作者よって墳墓は削り取られてきたと思われます。これが推古帝の眞墳墓との説もあり、地元では公園化計画により墳墓の崩壊を阻止する動向がみられます。

(6) 小野妹子（遣隋使）の墓

文化・仏教伝来に寄与した遣唐使は多い。これに先駆け摂政厩戸皇子の命により遣隋使として小野妹子が海を渡っています。第一回目は中国皇帝に国の威信をかけ差し出した有名な親書（日出る処の天子書を日没する処の天子に致す・・・）が皇帝煬帝の逆鱗に触れたが再度派遣され遣唐使が国の威信をかけて国交を開き後の遣唐使の活躍に繋り、小野妹子は帰国後高い官位を授かり、太子の山里に歴史ある科長神社に守られるように祀られています。この事から聖徳太子（厩戸皇子）による官位12階・17条憲法制定などの国内行政改革と並び異国との外交成果として高く評価されています。

4 前方後円墳のふしぎ

1) 前方後円墳の起源

前方後円墳は2世紀から6世紀の間に造られた大王級の墳墓です。円形部分は埋葬個所で前方部は祭祀の場とされています。この墳墓の代表格が大阪堺の大仙古墳であり周辺地区一帯の古墳群（49個）が、令和元年7月に世界遺産に登録されました。因みに飛鳥時代の卑弥呼の墓（奈良県桜井市）とされる「箸墓」も前方後円墳で、韓国にも古代の前方後円墳が十数基あるが造成年代が若いので前方後円墳は倭国（日本）固有のものとされています。

2) 前方後円墳の形

前方後円墳は歴史的には古いタイプの形で、後年に円墳や方墳に移行しています。世界遺産に登録された古墳群のうち ①仁徳陵 ②応神陵 ③履中陵がベストスリーのサイズです。因みに最大級の仁徳天皇陵築造には労務人力2000人で15年を要するとのゼネコン試算があります。巨大古墳の周囲には小さな古墳・陪塚(ばいちょう)が築かれています。家臣の墓ではないとの説もあります。この時代は中国や韓国との緊張があり国力の誇示が必要であったので大王級墳墓を巨大化させ、内外に見せる意味合いが強く、スケールと特異な形の墳墓を造らせた当時の大王の権力は計り知れないものがあります。

3) 巨大古墳・前方後円墳の終焉

前方後円墳は弥生時代から造られ飛鳥時代に大王級の権力誇示と海外との交流を背景に大型化したとみられ、聖徳太子時代から蘇我氏と物部氏の抗争が続き、後に覇権を掌握していた蘇我一族・入鹿の暗殺や蝦夷自害などの「乙巳(いつし)の変(645年)」が没発、これが契機で大化の改新が始まり、一連の政治改革の中「薄葬令」により莫大な経費を要する大型墳墓造成はなくなった。「大化」は我国最初の元号であり、日本の律令国家がスタートした年でもあります。

5 古代ミステリアスな疑問と推理

(1) 厩戸皇子は推古天皇の摂政として活躍、なぜ天皇にならなかったのか

当然天皇の候補者の一人であったが、後継者と見られる推古帝の長男・竹田皇子が若く逝去していますが、推古帝は長命（74歳）で天皇在位が長く、一方、太子は48歳で急逝し、推古帝と太子の二人で協力して大きな改革を推進した心中を推理することは難しい。

(2) 推古天皇は「日本初の女性天皇」になれた理由は何か

蘇我氏と物部氏の権力争いで蘇我稲目が娘2人を欽明天皇妃に送込み、以後複雑な血族結婚や暗殺が行われた。そのため天皇は在位が短く蘇我一族に近い男子適格者がなくなり、美人で有能な額田部皇女（敏達天皇妃）が馬子に推され初の女性天皇（推古帝）の位についています。推古帝は直ちに一族の聡明な聖徳太子を摂政にし、影の実力者・臣下の蘇我馬子の要求をも拒否できる実力者になっています。

(3) 当時の大王級豪族に近親婚が多いのはなぜか

当時の天皇系統図を見ると複雑な血族関係がみられます。蘇我一族の額田部皇女（推古帝）と夫の天皇直系・敏達天皇（第30代）は、共通の父親が欽明天皇（第29代）であり二人は母の違う異母兄妹で、摂政・厩戸皇子の両親は欽明天皇妃となる蘇我稲目の娘達（長女と次女）から生まれた用明天皇と穴穂部皇女であり、両親とも蘇我一族（稲目）の血筋にあります。蘇我一族は稲目・馬子・蝦夷・入鹿と続くが蘇我馬子は娘と孫娘を34代舒明天皇妃に嫁がしています。この時代は近親婚が特別な事ではないとされていますが、権力闘争で優位に位置する蘇我一族が血縁関係で歴代天皇に強く関わり政治と権力行使の維持で近親婚が自ずと多くなったと考えられます。

(4) 竹内街道沿いに巨大古墳が多いのはなぜか。

竹内街道は日本初の国道といわれ、なにわの海（堺港・難波津）からやまと（倭）へ地方豪族や異国からの来訪者が多く往来したと思われる。特に海に近い堺市に世界一広大な「仁徳天皇陵」、羽曳野市に大型の応神天皇陵が存在し、当時、莫大な資財と人力を擁して海に近く超大型の人工物（古墳）をつくり、海外からの使節団に対して国力を誇示しようとする意図をみることができます。竹内街道の太子地区には蘇我一族の天皇陵が5箇所あります。このエリアからは石棺の出土が多く、石棺が容易に調達できた背景には、墳墓（古墳）近くの二上山が太古に火山噴火し山麓に凝灰岩塊（屯鶴峰:どんずるぼう）を形成したことから石棺が容易に工作できたものと考えられます。なお墳墓（古墳）や石棺は生前から大掛かりな準備しなければ型にならず、当時としては大型国家事業でもあったと推察できます。

後記

わが国のルーツとなる古墳は、なぜか近畿地方に多く見ることができます。余暇にまかせて体力増強を兼ね、それぞれの歴史時代を生活した人々の時間を想像し、愉しく探訪する年齢になっている己を近年特に感じています。

昭和・平成・令和と三代の天皇の時代の歩み80年、この時代歴史を駆け足で振り返ると、敗戦、食糧難で飢餓を憶え、木造校舎とコンクリート校舎の混在する三軒茶屋学舎で

多くの学友と出逢い獣医職で社会人となり、平成初期の退職まで、全力で走り抜けてきました。今日では、限られた人生を伴侶との思い出づくりに各地を探訪しています。

なお、この拙文は、獣医学と関係のないレポートですが、神武天皇以来126代の天皇が2019年5月即位、元号「令和」を迎え、改めて古墳からみる天皇の歴史を再認識するために編纂したもので、昭和32年入学時同期「愛信櫻会」幹事の要望で「角笛会報誌」初めて投稿します。時代背景、記述の誤りなど、読者の寛大な御心で、ご容赦ください。

参考文献

- 1 大阪市観光案内パンフレット
- 2 各種の歴史図書
- 3 各所史跡案内板